公立大学法人 福井県立大学

Fukui Prefectural University

ファカルティ・ディベロップメント

報 告 書 2017

2018 年 3 月

ＦＤワーキンググループ

目　　次

はじめに---------- i

１．活動概要---------- 1

１．１　委員の構成---------- 1

１．２　事業の実施状況---------- 1

１．２．１　授業評価---------- 1

１．２．２　授業公開---------- 12

１．２．３　ＦＤ研修---------- 12

１．２．４　実施要項---------- 13

２．各部局のＦＤ活動

２．１　経済学部

２．１．１　授業評価アンケート---------- 14

２．１．２　授業公開---------- 14

２．１．３　部局内ＦＤ教員懇談会---------- 15

２．１．４　授業改善についての課題と展望---------- 16

２．２　生物資源学部

２．２．１　授業評価---------- 17

２．２．２　授業公開の方針と実績---------- 17

２．２．３　授業改善の取り組み---------- 17

２．２．４　授業改善についての課題と展望---------- 20

２．３　海洋生物資源学部

２．３．１　授業評価---------- 21

２．３．２　授業公開の方針と実績---------- 21

２．３．３　ＦＤ研修への参加 ---------- 22

２．３．４　授業改善についての課題と展望---------- 22

２．３．５　その他---------- 22

２．４　看護福祉学部

２．４．１　授業評価---------- 24

２．４．２　授業公開---------- 25

２．４．３　授業改善への取り組み---------- 26

２．４．４　ＦＤ研修---------- 27

２．４．５　授業改善についての課題と展望---------- 34

２．５　学術教養センター

２．５．１　授業評価アンケートの結果---------- 36

２．５．２　授業公開の方針と実績---------- 36

２．５．３　部局内ＦＤ研修---------- 37

２．５．４　授業改善についての課題と展望---------- 37

はじめに

福井県立大学には、経済学部、生物資源学部、海洋生物資源学部、看護福祉学部、学術教養センター、地域経済研究所、恐竜学研究所、図書館、キャリアセンターと多様な部局が存在します。各部局は独自の役割を担いつつ、相互に連携しながら、学生の教育に取り組んでいます。本年度も例年同様以下のように FD 活動とその中心をなす授業評価を行いましたが、学内委員会の見直しに伴って FD 担当の委員会が「教育学習支援チーム」から「FD ワーキンググループ」へ名称変更になりました。また、全学の教員・職員を対象とする「全学ミーティング」での FD 活動が始まりました。

授業評価は、学部生、大学院生、科目等履修生・聴講生を対象として、少人数の授業やオムニバス授業、実験・実習などを除いて、基本的に専任教員および非常勤教員担当のすべての授業で行い、その結果は学内 LAN 内のウェブページにて公開しています。各部局内ではその結果を部局長と FD ワーキンググループメンバーが閲覧し、必要に応じて授業改善のために担当教員と話し合う場を設けることができるようになっています。授業公開や授業改善のための情報交換については、それぞれの部局の教育システムや教育内容に応じて最も適切だと考えられる仕方で各部局ごとに取り組んでいます。そして、授業評価の評価点はすべての部局において向上や高いレベルでの維持が認められます。また F レックスの合宿研修会に教員が参加し、FD に関する新たな動向や事例について他大学の参加者と多くの情報交換ができました。

文部科学省の COC+事業における福井県内５大学による合同授業が３年目となりました。教職員や学生の負担が増すことは否定できませんが、本学からの参加学生も少しずつ増え、それ以前にはほとんどなかった他大学の学生との交流が促進されています。

加えて今年度より教職員全員による全学ミーティングが開催されるようになりました。これは、言わば全学教授会の様なもので、学長をはじめ執行部と全教職員が直接議論し、コミュニケーションを図るものです。今年度は４回開かれ、特に２回目の全学ミーティングでは、学生意識調査の分析結果報告やワークショップ形式による全学 FD の研修会が開かれ、また４回目には障害のある学生への対応について研修会が開かれ、一般的な情報を得るだけではなく、他部局の取り組みへの相互理解が深められました。

FD とは「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」と定義されています。しかしこのような活動はとかくパターン化し、形骸化し、ノルマ化してしまいがちです。持続可能性は満足して立ち止まらないことに、ぶれずに変化し続けることにあります。より良い大学を目指して不断の改革を行っていかなければなりません。従いまして、この報告書が本学の FD 活動のさらなる活性化に寄与し、本学がより良い大学へと前進することを願っています。最後に、本年度一年間本学の FD 活動に献身的に参加され、本報告書のとりまとめにご協力くださったグループメンバーおよび事務局の皆様のご尽力に深謝いたします。

2018 年 3 月

ＦＤワーキンググループ代表　塚原　典央

1. 活動概要

1.1 委員の構成

2017 年度のＦＤワーキンググループメンバーは、以下の 6 名の教員である。

2017 年度ＦＤワーキンググループ委員名簿

氏　　名	所　　属	職	役　　割
塚　原　典　央		副　学　長	委員長
桑　原　美　香	経済学部	准　教　授	委　　員
塩　野　克　宏	生物資源学部	准　教　授	委　　員
田　原　大　輔	海洋生物資源学部	准　教　授	委　　員
北　　明　美	看護福祉学部	教　　授	委　　員
加 藤 ま ど か	学術教養センター	准　教　授	委　　員

1.2 事業の実施状況

1.2.1 授業評価

実施要項、実施概要、質問および回答用紙、全体集計結果、経年特性（前期、後期）を次頁より順に掲載する。

平成29年度 学生による授業評価の実施結果

（前期）実施期間　平成29年7月14日（金）～7月27日（木）

調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	2,905 枚	5,443 枚
生物資源学部	731 枚	973 枚
海洋生物資源学部	872 枚	1,063 枚
看護福祉学部	1,534 枚	2,125 枚
学術教養センター	4,313 枚	6,589 枚
キャリアセンター	0 枚	19 枚
計	10,355 枚	16,212 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	20 枚	29 枚
生物資源学研究科	19 枚	107 枚
看護福祉学研究科	0 枚	6 枚
計	39 枚	142 枚

参加教員

＜学部＞		
経済学部	28 人	93.3%
生物資源学部	14 人	87.5%
海洋生物資源学部	15 人	93.8%
看護福祉学部	25 人	86.2%
学術教養センター	20 人	87.0%
キャリアセンター他	3 人	100.0%
非常勤講師	44 人	74.6%
計	149 人	84.7%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	3 人	100.0%
生物資源学研究科	4 人	40.0%
看護福祉学研究科	0 人	0.0%
キャリアセンター他	1 人	50.0%
計	8 人	50.0%

参加科目

＜学部＞		
経済学部	59 科目	85.5%
生物資源学部	23 科目	100.0%
海洋生物資源学部	21 科目	91.3%
看護福祉学部	44 科目	72.1%
学術教養センター	144 科目	81.4%
キャリア教育科目	1 科目	33.3%
計	292 科目	82.0%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	4 科目	80.0%
生物資源学研究科	3 科目	27.3%
看護福祉学研究科	0 科目	0.0%
計	7 科目	41.2%

（後期）実施期間　平成30年1月17日（水）～1月30日（火）

調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	2,308 枚	4,883 枚
生物資源学部	429 枚	701 枚
海洋生物資源学部	554 枚	863 枚
看護福祉学部	1,577 枚	2,200 枚
学術教養センター	3,486 枚	6,025 枚
キャリアセンター	0 枚	0 枚
計	8,354 枚	14,672 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	31 枚	45 枚
生物資源学研究科	8 枚	58 枚
看護福祉学研究科	5 枚	20 枚
計	44 枚	123 枚

参加教員

＜学部＞		
経済学部	31 人	100.0%
生物資源学部	17 人	89.5%
海洋生物資源学部	14 人	100.0%
看護福祉学部	21 人	91.3%
学術教養センター	22 人	100.0%
キャリアセンター他	5 人	100.0%
非常勤講師	43 人	78.2%
計	153 人	90.5%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	7 人	100.0%
生物資源学研究科	3 人	75.0%
看護福祉学研究科	2 人	22.2%
計	12 人	60.0%

参加科目

＜学部＞		
経済学部	92 科目	74.8%
生物資源学部	17 科目	63.0%
海洋生物資源学部	18 科目	85.7%
看護福祉学部	43 科目	68.3%
学術教養センター	118 科目	85.5%
キャリア教育科目	1 科目	100.0%
計	289 科目	77.5%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	8 科目	100.0%
生物資源学研究科	3 科目	50.0%
看護福祉学研究科	2 科目	20.0%
計	13 科目	54.2%

福井県立大学
授業に関する調査

質問および回答用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

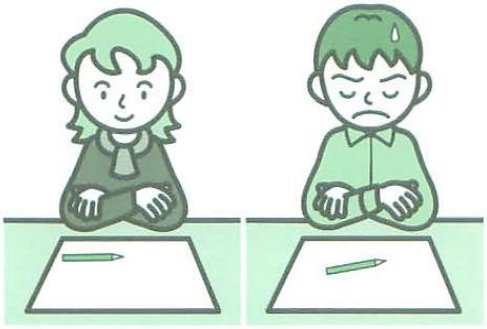
回答は裏面の回答欄に記入してください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号をマーク、記述してください。

記入上の注意

1：選択回答の場合はマークシート記入を、記述回答の場合は対応する空欄に記述してください。
2：記入は濃い(B 程度)鉛筆またはシャープペンシルで強く書いてください。
3：訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消してください。
4：用紙は、コンピュータ処理しますので、折り曲げたり汚したりしないでください。

マーク例） 良い例 (2)・・・▶● 悪い例 (2)・・・▶ (2) (2) (2) (2)



本アンケートによる(全学、学部別等)授業評価結果は、本学ホームページ上で今学期末に開示予定です。
過去の集計結果は http://www.s.fpu.ac.jp/FD/lecinq.html **をご覧ください。**

学籍番号の上から1ケタ目の数字をマークしてください。

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9　例）平成21年4月入学生・・・0

学籍番号の上から2ケタ目の数字をマークしてください。

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9　例）平成21年4月入学生・・・9

学部生 所属の番号をマークしてください。

1：経済学部経済学科　2：経済学部経営学科　3：生物資源学部生物資源学科　4：海洋生物資源学部海洋生物資源学科
5：看護福祉学部看護学科　6：看護福祉学部社会福祉学科　7：科目等履修生・聴講生

1 2 3 4 5 6 7

大学院生 所属の番号をマークしてください。

8：経済・経営学研究科 地域・国際経済専攻　9：経済・経営学研究科 経営学専攻　10：生物資源学研究科 生物資源学専攻
11：海洋生物資源学研究科 海洋生物資源学専攻　12：看護福祉学研究科 看護学専攻　13：看護福祉学研究科 社会福祉学専攻　14：科目等履修生・聴講生

8 9 10 11 12 13 14

質問および回答欄

Q1 この授業（課題、レポート、予習復習を含む）に意欲的に取り組みましたか？
①意欲的に取り組まなかった　②あまり意欲的に取り組まなかった　③ある程度意欲的に取り組んだ　④意欲的に取り組んだ

1 2 3 4

Q2 先生の講義の方法（話し方、板書、プロジェクターの使用、学習支援システム等の活用）はどうでしたか？
①不適切　②やや不適切　③まずまず適切　④適切

1 2 3 4

Q3 授業中の内容はどの程度理解できましたか？
①理解できなかった　②あまり理解できなかった　③ある程度理解できた　④理解できた

1 2 3 4

Q4 この授業の分野への関心は高まりましたか？
①高まらなかった　②あまり高まらなかった　③少し高まった　④高まった

1 2 3 4

Q5 この授業を総合的に評価してください。
①良くない　②あまり良くない　③まずまず良い　④良い

1 2 3 4

Q6 授業を受けた上での感想（先生の授業への熱意、方法、教材、授業内容はシラバスに即していたか、教室環境など）を良かった点あるいは不備な点について自由に書いてください。

Q6の自由記述欄

Q7 教員設定の質問（別紙参照）

1 2 3 4

Q8 教員設定の質問（別紙参照）

Q8の自由記述欄

ご協力ありがとうございました

全体集計結果の見方

次頁より授業評価の集計結果を学部（前期・後期），大学院（前期・後期）の順に掲載する。以下に、集計結果の見方を記す。

集計数	回答された全てのアンケートから学部・学科・入学年度が不明のデータを除いたもの
Q1 から Q5	アンケートの Q1 から Q5 に対応
数値上段	平均値（質問は、4 件法）
数値下段	母標準偏差。数値が大きい場合、平均値周りに正規分布状にばらつきが大きい時もあるが、良い評価と悪い評価が２分されている場合もあるので要注意。
集計方法	設問は、回答選択肢「１，２，３，４」をそれぞれ「1 点，2 点，3 点，4 点」と得点化、設問に対して無回答の場合は得点化せず、かつ有効回答数としては計上していない。この得点化規則に則り、設問別、集計グループ別に合計得点を求めて、有効回答数で割った平均値を上段に、母標準偏差を下段に示す。無回答の場合の人数は母集団に含めず。「—」の欄は有効回答が無かったことを示す。

〔集計グループ〕

全体	全ての集計対象者
学部学科別	当該学部または学科の学生の評価結果を集計
入学年次別	学部学科の枠を越え，学生の入学年次（西暦年の下２桁）別に集計
部局別	当該学部に所属する教員が提供する科目に対する評価結果を集計
規模別	授業が行われた教室の大小別に集計

全体集計結果　（学部・前期）

集計グループ	（ 集計数 ）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	（ 9864 ）	3.27 0.68	3.36 0.67	3.19 0.70	3.21 0.76	3.38 0.65
学部学科別	（ 9864 ）					
経済学部	（ 5034 ）	3.25 0.70	3.33 0.68	3.18 0.72	3.18 0.76	3.35 0.66
経済学科	（ 2482 ）	3.24 0.71	3.33 0.69	3.16 0.72	3.17 0.76	3.35 0.66
経営学科	（ 2552 ）	3.27 0.68	3.34 0.68	3.20 0.71	3.18 0.76	3.36 0.65
生物資源学部	（ 1126 ）	3.30 0.64	3.38 0.64	3.23 0.65	3.29 0.69	3.42 0.62
生物資源学科	（ 1126 ）	3.30 0.64	3.38 0.64	3.23 0.65	3.29 0.69	3.42 0.62
海洋生物資源学部	（ 1313 ）	3.21 0.69	3.34 0.69	3.16 0.71	3.15 0.80	3.37 0.66
海洋生物資源学科	（ 1313 ）	3.21 0.69	3.34 0.69	3.16 0.71	3.15 0.80	3.37 0.66
看護福祉学部	（ 2383 ）	3.33 0.67	3.42 0.64	3.21 0.68	3.26 0.76	3.42 0.64
看護学科	（ 1523 ）	3.39 0.65	3.44 0.65	3.23 0.67	3.30 0.76	3.44 0.64
社会福祉学科	（ 860 ）	3.23 0.70	3.39 0.62	3.17 0.69	3.18 0.75	3.36 0.64
科目等履修生・聴講生	（ 8 ）	2.75 0.83	3.00 1.00	2.63 0.70	3.25 0.97	3.25 0.97
入学年次別	（ 9864 ）					
１０生	（ 8 ）	2.88 0.78	3.38 0.48	2.75 0.43	2.88 0.33	3.13 0.33
１１生	（ 7 ）	3.14 0.35	3.29 0.70	3.14 0.83	3.14 0.64	3.57 0.49
１２生	（ 39 ）	3.31 0.56	3.36 0.53	3.15 0.70	3.18 0.64	3.31 0.51
１３生	（ 65 ）	3.49 0.70	3.72 0.57	3.52 0.70	3.63 0.57	3.69 0.55
１４生	（ 459 ）	3.37 0.66	3.49 0.65	3.41 0.63	3.42 0.67	3.54 0.58
１５生	（ 2206 ）	3.25 0.63	3.31 0.65	3.17 0.67	3.19 0.73	3.33 0.64
１６生	（ 2967 ）	3.25 0.70	3.34 0.68	3.19 0.70	3.22 0.76	3.37 0.65
１７生	（ 4113 ）	3.28 0.70	3.38 0.67	3.17 0.71	3.17 0.78	3.39 0.65
部局別	（ 9864 ）					
経済学部	（ 2784 ）	3.22 0.70	3.26 0.71	3.11 0.73	3.13 0.76	3.29 0.68
生物資源学部	（ 703 ）	3.23 0.63	3.29 0.64	3.16 0.64	3.21 0.70	3.33 0.62
海洋生物資源学部	（ 834 ）	3.23 0.63	3.29 0.64	3.16 0.64	3.21 0.70	3.33 0.62
看護福祉学部	（ 1485 ）	3.34 0.67	3.42 0.64	3.23 0.68	3.29 0.76	3.43 0.65
学術教養センター	（ 4058 ）	3.32 0.68	3.43 0.64	3.25 0.68	3.25 0.75	3.44 0.62
キャリアセンター他	（ 0 ）	0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00
規模別	（ 9864 ）					
１００人以上	（ 5160 ）	3.21 0.70	3.29 0.69	3.12 0.72	3.14 0.78	3.31 0.67
１００人未満	（ 4704 ）	3.33 0.66	3.44 0.63	3.27 0.66	3.28 0.73	3.46 0.61

全体集計結果　（学部・後期）

集計グループ	（ 集計数 ）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	（ 8067 ）	3.31	3.41	3.25	3.27	3.43
		0.67	0.66	0.68	0.73	0.63
学部学科別	（ 8067 ）					
経済学部	（ 4236 ）	3.28	3.38	3.22	3.26	3.40
		0.68	0.66	0.67	0.72	0.63
経済学科	（ 2238 ）	3.27	3.38	3.21	3.25	3.41
		0.67	0.64	0.65	0.70	0.61
経営学科	（ 1998 ）	3.30	3.38	3.24	3.26	3.39
		0.68	0.68	0.70	0.74	0.66
生物資源学部	（ 765 ）	3.25	3.39	3.16	3.19	3.39
		0.65	0.60	0.67	0.70	0.58
生物資源学科	（ 765 ）	3.25	3.39	3.16	3.19	3.39
		0.65	0.60	0.67	0.70	0.58
海洋生物資源学部	（ 935 ）	3.29	3.46	3.24	3.22	3.47
		0.71	0.66	0.71	0.78	0.62
海洋生物資源学科	（ 935 ）	3.29	3.46	3.24	3.22	3.47
		0.71	0.66	0.71	0.78	0.62
看護福祉学部	（ 2115 ）	3.41	3.46	3.32	3.36	3.48
		0.64	0.67	0.67	0.73	0.64
看護学科	（ 1518 ）	3.48	3.51	3.36	3.42	3.52
		0.60	0.64	0.66	0.72	0.62
社会福祉学科	（ 597 ）	3.23	3.36	3.22	3.22	3.37
		0.70	0.72	0.68	0.76	0.69
科目等履修生・聴講生	（ 16 ）	3.38	3.56	3.38	3.88	3.56
		0.78	0.50	0.60	0.33	0.50
入学年次別	（ 8067 ）					
１０生	（ 1 ）	3.00	4.00	3.00	4.00	4.00
		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
１１生	（ 3 ）	4.00	3.67	3.67	4.00	3.67
		0.00	0.47	0.47	0.00	0.47
１２生	（ 36 ）	3.36	3.58	3.39	3.36	3.58
		0.71	0.49	0.72	0.63	0.49
１３生	（ 71 ）	3.17	3.48	3.30	3.30	3.45
		0.56	0.53	0.57	0.68	0.58
１４生	（ 392 ）	3.46	3.53	3.40	3.45	3.56
		0.61	0.64	0.68	0.70	0.61
１５生	（ 1380 ）	3.29	3.39	3.27	3.31	3.41
		0.65	0.66	0.63	0.69	0.65
１６生	（ 2514 ）	3.31	3.39	3.22	3.26	3.41
		0.66	0.65	0.68	0.72	0.62
１７生	（ 3670 ）	3.31	3.42	3.23	3.25	3.43
		0.70	0.67	0.71	0.78	0.65
部局別	（ 8067 ）					
経済学部	（ 2243 ）	3.29	3.35	3.21	3.25	3.37
		0.67	0.67	0.66	0.70	0.64
生物資源学部	（ 414 ）	3.18	3.31	3.10	3.17	3.33
		0.60	0.59	0.66	0.67	0.59
海洋生物資源学部	（ 531 ）	3.27	3.39	3.17	3.18	3.42
		0.71	0.68	0.72	0.81	0.64
看護福祉学部	（ 1530 ）	3.42	3.46	3.31	3.37	3.47
		0.64	0.69	0.68	0.75	0.67
学術教養センター	（ 3349 ）	3.30	3.45	3.27	3.28	3.46
		0.69	0.62	0.68	0.73	0.60
キャリアセンター他	（ 0 ）	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
規模別	（ 8067 ）					
１００人以上	（ 4063 ）	3.27	3.35	3.17	3.22	3.36
		0.67	0.67	0.69	0.74	0.64
１００人未満	（ 4004 ）	3.36	3.48	3.33	3.33	3.50
		0.67	0.63	0.65	0.72	0.62

全体集計結果　（大学院・前期）

集計グループ	（ 集計数 ）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	（ 37 ）	3.22 0.78	3.70 0.46	3.24 0.59	3.59 0.64	3.73 0.44
研究科専攻別	（ 37 ）					
経済・経営学研究科	（ 20 ）	3.10 0.89	3.80 0.40	3.40 0.66	3.70 0.56	3.80 0.40
地域・国際経済政策専攻	（ 2 ）	2.00 1.00	3.50 0.50	2.50 0.50	3.50 0.50	3.50 0.50
経営学専攻	（ 18 ）	3.22 0.79	3.83 0.37	3.50 0.60	3.72 0.56	3.83 0.37
生物資源学研究科	（ 17 ）	3.35 0.59	3.59 0.49	3.06 0.42	3.47 0.70	3.65 0.48
生物資源学専攻	（ 12 ）	3.50 0.65	3.83 0.37	3.17 0.37	3.67 0.62	3.83 0.37
海洋生物資源学専攻	（ 5 ）	3.00 0.00	3.00 0.00	2.80 0.40	3.00 0.63	3.20 0.40
看護福祉学研究科	（ 0 ）	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －
看護学専攻	（ 0 ）	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －
社会福祉学専攻	（ 0 ）	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －
科目等履修生・聴講生	（ 0 ）	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －
入学年次別	（ 37 ）					
１０生	（ 0 ）	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －
１１生	（ 0 ）	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －
１２生	（ 0 ）	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －
１３生	（ 2 ）	3.50 0.50	3.50 0.50	3.50 0.50	3.50 0.50	3.50 0.50
１４生	（ 0 ）	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －
１５生	（ 0 ）	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －
１６生	（ 8 ）	3.25 0.66	3.88 0.33	3.25 0.66	3.63 0.48	3.75 0.43
１７生	（ 27 ）	3.19 0.82	3.67 0.47	3.22 0.57	3.59 0.68	3.74 0.44
部局別	（ 37 ）					
経済・経営学研究科	（ 20 ）	3.10 0.89	3.80 0.40	3.40 0.66	3.70 0.56	3.80 0.40
生物資源学研究科	（ 17 ）	3.35 0.59	3.59 0.49	3.06 0.42	3.47 0.70	3.65 0.48
看護福祉学研究科	（ 0 ）	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －

全体集計結果　（大学院・後期）

集計グループ	（ 集計数 ）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	（ 44 ）	3.64 0.53	3.82 0.39	3.41 0.58	3.68 0.59	3.75 0.48
研究科専攻別	（ 44 ）					
経済・経営学研究科	（ 31 ）	3.68 0.47	3.84 0.37	3.39 0.49	3.71 0.52	3.77 0.42
地域・国際経済政策専攻	（ 4 ）	3.50 0.50	4.00 0.00	3.50 0.50	4.00 0.00	4.00 0.00
経営学専攻	（ 27 ）	3.70 0.46	3.81 0.39	3.37 0.48	3.67 0.54	3.74 0.44
生物資源学研究科	（ 8 ）	3.25 0.66	3.63 0.48	3.38 0.86	3.38 0.86	3.50 0.71
生物資源学専攻	（ 8 ）	3.25 0.66	3.63 0.48	3.38 0.86	3.38 0.86	3.50 0.71
海洋生物資源学専攻	（ 0 ）	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －
看護福祉学研究科	（ 5 ）	4.00 0.00	4.00 0.00	3.60 0.49	4.00 0.00	4.00 0.00
看護学専攻	（ 5 ）	4.00 0.00	4.00 0.00	3.60 0.49	4.00 0.00	4.00 0.00
社会福祉学専攻	（ 0 ）	― ―	― ―	― ―	― ―	― ―
科目等履修生・聴講生	（ 0 ）	― ―	― ―	― ―	― ―	― ―
入学年次別	（ 44 ）					
１０生	（ 0 ）	― ―	― ―	― ―	― ―	― ―
１１生	（ 0 ）	― ―	― ―	― ―	― ―	― ―
１２生	（ 0 ）	― ―	― ―	― ―	― ―	― ―
１３生	（ 0 ）	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －
１４生	（ 0 ）	－ －	－ －	－ －	－ －	－ －
１５生	（ 0 ）	― ―	― ―	― ―	― ―	― ―
１６生	（ 3 ）	3.67 0.47	4.00 0.00	3.67 0.47	4.00 0.00	4.00 0.00
１７生	（ 41 ）	3.63 0.53	3.80 0.40	3.39 0.58	3.66 0.61	3.73 0.50
部局別	（ 44 ）					
経済・経営学研究科	（ 31 ）	3.68 0.47	3.84 0.37	3.39 0.49	3.71 0.52	3.77 0.42
生物資源学研究科	（ 8 ）	3.25 0.66	3.63 0.48	3.38 0.86	3.38 0.86	3.50 0.71
看護福祉学研究科	（ 5 ）	4.00 0.00	4.00 0.00	3.60 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00

図1　重要項目の経年特性（前期）

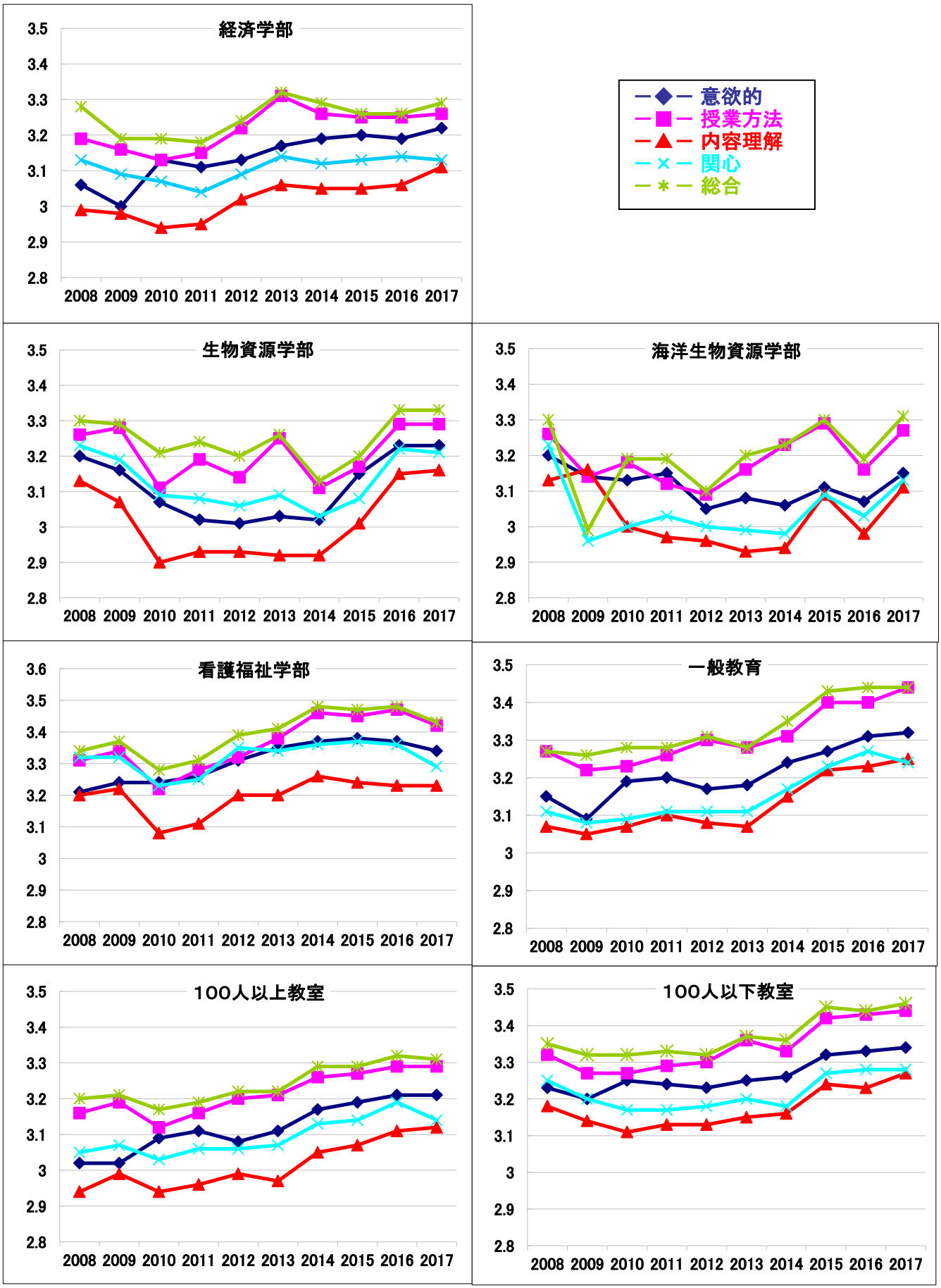
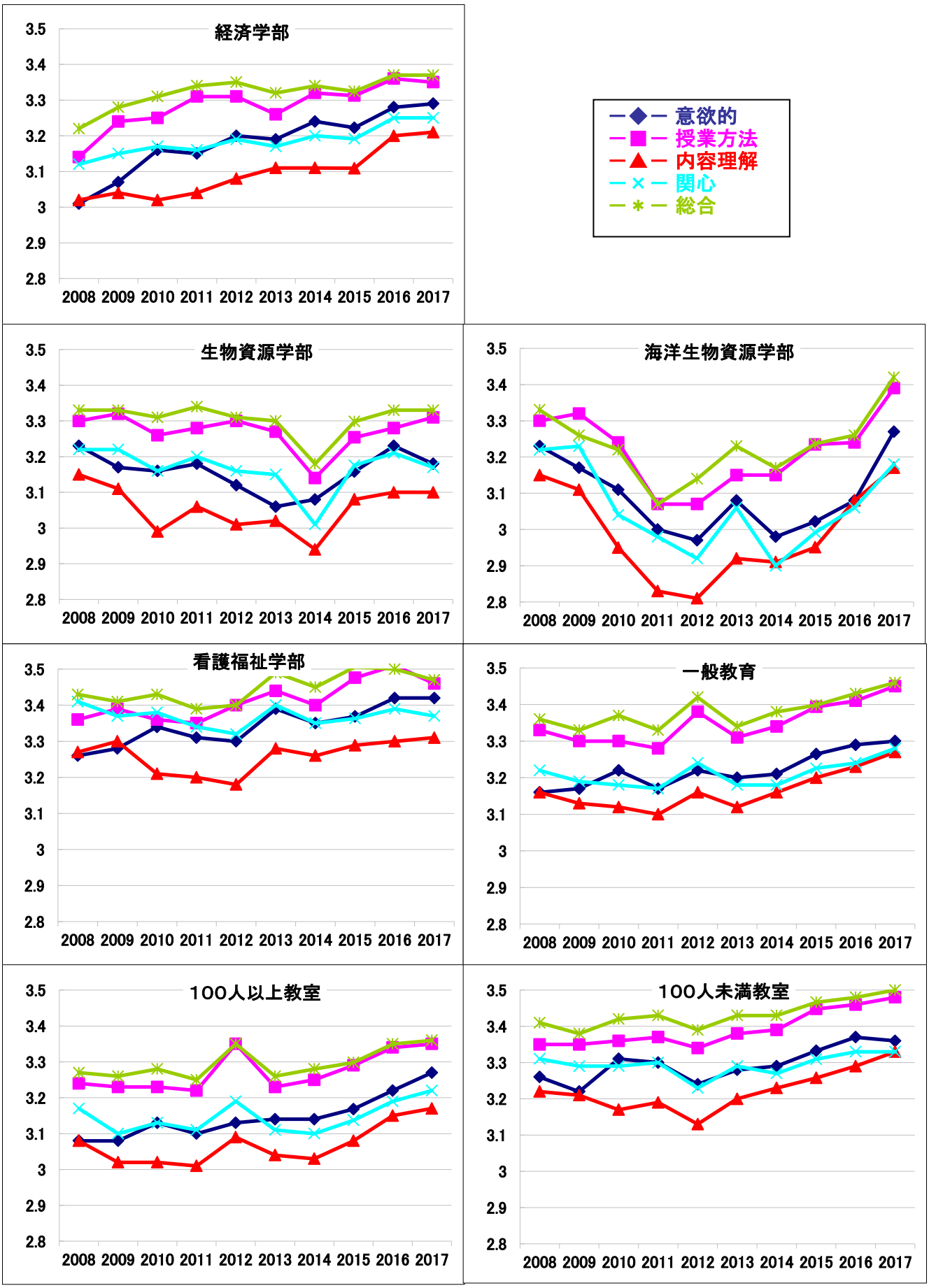


図2　重要項目の経年特性（後期）



1.2.2　授業公開

詳細は 2 章「各部局の FD 活動」にて報告する。

1.2.3　ＦＤ研修

全体研修のみ示す。それぞれの詳細および各部局で行った研修は、2 章「各部局のＦＤ活動」にて報告する。

学内研修

参加イベント・日程・会場	参加者数
全学ミーティング　平成 29 年 6 月 14 日（水）多目的ホール	教職員　１６０名
全学ミーティング　平成 29 年 12 月 13 日（水）多目的ホール （内容） ・学生意識調査の分析結果報告　徳野准教授 ・全学ＦＤ（ワークショップ形式による討論）　山川教授	教職員　１３６名
全学ミーティング　平成 30 年 1 月 10 日（水）多目的ホール	教職員　１４４名
全学ミーティング　平成 30 年 3 月 1 日（水）多目的ホール	教職員　１３０名

学外研修

参加イベント・日程・会場	参加者数（本学）
第 8 回Ｆレックス合宿研修会　平成 29 年 9 月 6 日（水）～7 日（木） 福井工業高等専門学校	教員　９名
ＴＰチャート研修会　平成 29 年 12 月 14 日（木） 福井県立大学永平寺キャンパス	教員　８名
第６回ティーチング・ポートフォリオ作成ＷＳ 第２回アカデミック・ポートフォリオ作成ＷＳ 平成 30 年 3 月 16 日（金）～18 日（日）　福井県立大学永平寺キャンパス	教員　１名

1.2.4 実施要項

福井県立大学学生による授業評価実施要項

１　目　　的
　学生による授業評価を通じ、教員が授業の内容および方法の改善を図ることにより、教育力の向上に取り組む。

２　対象教員
　専任教員および非常勤講師

３　対象学生
　学部生、大学院生、科目等履修生・聴講生

４　対象授業
　（１）から（３）を除く授業科目
　ただし、（１）から（３）については、学部・学科および教員が希望する場合は実施することができる。
　（１）オムニバス授業
　（２）実験、実習（指導)、論文（指導)、研究、卒業研究、演習教科
　（３）実施期間終了後の集中講義

５　期　　間
　前期科目：　前期 期末試験期間前の２週間
　後期科目、通年科目：　後期 期末試験期間前の２週間
　集中講義は、原則、講義の最終日に実施する。

６　方　　法
　アンケート用紙にて実施する。
　ただし、事前の申請により、ＬＭＳにて実施することができる。

７　項　　目
　評価は、下記項目について実施する。
　（１）から（５）については、４段階評価とし、（６）については、自由記述とする。
　ただし、下記項目に加えて、教員が質問を設定することができる。

　（１）受講の意欲
　（２）授業方法
　（３）内容の理解
　（４）関心
　（５）総合評価
　（６）感想等

８　評価結果の取扱い
　評価結果の集計終了後、授業科目ごとの評価結果とあわせて、アンケート用紙を教員に送付する。教員がアンケート用紙を事務局に返却後、評価結果およびＬＭＳ実施データともに部局長の閲覧に供する。部局長は必要に応じて授業改善のための話し合いの場を設ける。
　評価結果は本要項の目的以外に使用してはならない。

９　評価結果の公開
　（１）　評価結果の公開については、専任教員のみ、授業科目ごとの評価結果（授業科目名、教員名、質問毎の平均点）を学内ＬＡＮ内のウェブページにて公開する。
　　ただし、７（６）感想等の記載内容については、公開しない。
　　評価結果の公開に当たっては、全体の集計結果についてもあわせて公開する。
　（２）　授業評価に対する専任教員のコメントを、学内ＬＡＮ内のウェブページにて公開する。

【 附　則 】
平成２６年　４月　１日 施行
平成２７年　５月２６日 改正（期間）
平成２９年　６月　７日 改正（評価結果の取扱い）

2.1 経済学部（山崎淳・桑原美香）

経済学部の本年度の FD 活動は、①「授業評価」（前期、後期）、②「授業公開」（2 件、うち前期 1 件、後期 1 件）、③大講義でのアクティブラーニングについての意見交換を目的とする教員懇談会を開催した（後期）。また、上記の以外にも、演習や外書講読の進め方等についての話し合いなど、FD 活動に関する自主的な議論は日常業務の中でも行われている。

2.1.1 授業評価アンケート

＜2017 年度前期授業評価アンケート＞

問	1.意欲的受講	2.授業方法	3.内容理解	4.関心	5.総合評価
経済学部平均	3.25 (+0.70)	3.33 (+0.68)	3.18 (+0.71)	3.18 (+0.76)	3.35 (+0.66)

＜2017 年度後期授業評価アンケート＞

問	1.意欲的受講	2.授業方法	3.内容理解	4.関心	5.総合評価
経済学部平均	3.28 (+0.68)	3.38 (+0.66)	3.22 (+0.67)	3.26 (+0.72)	3.40 (+0.63)

2.1.2 授業公開

（1）方針

経済学部の授業公開ポリシーは、従前通り、具体的な授業参観を通して公開者・参観者の授業改善に資することを目的とし、公開者と参観者の間で率直な意見交換を行うことである。

（2）実施実績

［前期］：1 件の授業公開

科目：演習Ⅰ、Ⅱ（合同ゼミ：川本ゼミ、杉山ゼミ、桑原ゼミ）

内容：エクセルを使った回帰分析講座

日時と講義概要：

●3 回シリーズの第 2 回目（係数の解釈と検定、練習問題）

5 月 23 日（火）4 限（14:40～16:10）…3 年生対象

同　5 限　（16:20～17:50）…4 年生対象

●3 回シリーズの第 3 回目（練習問題の解説、マルチコ、不均一分散、ダミー変数等）

5 月 30 日（火）4 限（14:40～16:10…3 年生対象

同　5 限　（16:20～17:50）…4 年生対象

場所：第 1 情報演習室

※3 年生対象と 4 年生対象の講義は基本的に同じ内容。

参加教員からのコメント（順不同）

・回帰分析の解説とパソコンを使った実習、それから宿題用の演習問題がバランスよく用意されており、また 1 時間半の中での時間配分もとても良い。宿題で仮説を書かせて推計結果の予想をさせる点が参考になった。
・過去に学生がインゼミや SMAP の報告会等で実際に分析したデータを例題にしてはどうか。2、3 年生はこれから取り組む課題についての具体的なイメージが湧き、4 年生はすでに報告したことの講評を聞く良い機会になる。
・データ分析への意欲を湧かせるのはなかなか難しい。分析のモチベーションを高めるための工夫はあるか。

［後期］1 件の授業公開を予定

科目名：卒業論文報告会
担当：廣瀬ゼミ、松岡ゼミ、桑原ゼミ
日時：2018 年 2 月 9 日（金）3-5 時限目
場所：Ｌ111、Ｌ112、Ｌ113
備考：大雪により中止

2.1.3　部局内ＦＤ教員懇談会

経済学部懇談会
日時：2018 年 1 月 31 日（水）、3 限（14:40～16：10）
場所：経済学部棟 9 階会議室(出席者 8 名)
テーマ：① 大講義でのアクティブラーニング
② その他

他大学で行われているアクティブラーニングを事例にして、特に大講義でどのように取り入れていくのが効果的か、意見公開した。

懇談会での議論の概要（順不同）

批判的な意見

- 学生が興味をもって受講した講義なら可能であろうが、100 名を超す必修講義でのアクティブラーニングは無理ではないか。
- テーマに関して、「大講義」という括りに問題があるのでは。本格的に実施するならば、演習と大講義の間の受講者 50 名までの「中講義」で対応するのはどうか。
- アクティブラーニングが重要なのではなく、自学自習に意味があるのではないか。最低限、教科書を買い事前に読んでくることをシラバスに明記すべきではないか。
- アクティブラーニングは学びの導入であるはずだが、教員が求めている水準に達していないにも関わらず、学生自身には「やった感」があるため、深く学ぶ前に講義が終わってしまう。

現行の環境に関する意見

- 配布資料をネット配布できないか。
- 大講義室でインターネットに繋げながら講義をすることはできないのか。
- スマートフォンを用いたアンケート調査(ex. レスポン)を講義中に利用できないか考えているが、機材整備が必要。全員がスマートフォンを所有している前提で講義を進めることはできないのではないか。中期計画等でとりあげ、予算化することも検討すべきではないか。
- 長崎大学などではモジュール方式(テーマ群から体系的に講義を選ぶ)で講義が行われているが、海外の「モジュール科目(集中的な学習)」は週ごとに講義が変わる。大講義の後にゼミがあり、議論が中心となる。週 1 回講義では生産性があがらない。集中型(2 泊 3 日)などで講義できないか。

その他（ＦＤアンケートについて）

- ＦＤアンケートを電子版にした方がアンケートを簡単に作れ、集計・解析などもスムースに行えるのではないか。
- ＦＤアンケートは試験後にするべきではないか。海外では試験後に実施し、回収率 3%程度という状況のようだが、それでもよいのではないか。

2.1.4 授業改善についての課題と展望

ゼミなどの少人数講義ではなく、多数の受講者がいる講義で、どのようにアクティブラーニングを進めるか意見交換を行ったが、その根底にあるのは「学生のやる気」である。講義中に映像を見せてコメントを書かせたり、アンケート調査やクイズをしたりするのは学生に興味を持たせるためのきっかけにすぎない。それよりも、事前の予習をどうさせるか、ひいては「反転学習」を徹底し、予習に重きを置く講義スタイルが重要になってくるのかもしれない。他大学では、画期的な講義メニューを構築したり、予算をかけて大人数の出欠管理やレポート提出、ファイル共有、即時アンケートなどができる学習支援ソフトを導入したりしている。変化のスピードが増す中、多様な学生の学習をどうサポートするか、本学の環境整備も急がれる。

2.2　生物資源学部（伊藤崇志・塩野克宏）

2.2.1　授業評価

学部の授業評価結果は、「意欲的受講」前期３．３０＋後期３．２５（前年３．２７＋３．２３）、「授業方法」前期３．３８＋後期３．３９（前年３．３４＋３．３４）、「内容理解」前期３．２３＋後期３．１６（前年３．１８＋３．１５）、「関心」前期３．２９＋後期３．１９（前年３．２５＋３．２１）、「総合評価」前期３．４２＋後期３．３９（前年３．３８＋３．３８）であり、前年と大差はなかった。ただし、教員により若干の差異があり、２点台の点数である教員が１名いた。また、授業評価を受けていない教員が複数名いた。

大学院の授業評価結果は、「意欲的受講」前期３．５０＋後期３．２５（前年３．３９）、「授業方法」前期３．８３＋後期３．６３（前年３．６１）、「内容理解」前期３．１７＋後期３．３８（前年前期３．２１）、「関心」前期３．６７＋後期３．３８（前年前期３．３９）、「総合評価」前期３．６５＋後期３．５０（前年前期３．６４）であった。総じて、良好に講義が進められていると判断した。

2.2.2　授業公開の方針と実績

（１）方針

生物資源学部では、各教員が、必要に応じて自分が担当していない講義を聴講し、授業内容を直接確認できるよう、全講義を対象に、希望者が事前に担当教員に連絡することでいつでも参観できる「随時公開制」を採っている。

（２）実績

今年度、担当外の講義を参観した教員はいなかった。本学部では、後述するように担当教員による講義の工夫等をアンケート調査により共有し、授業内容の連携を進めている。学生によるＦＤアンケート調査からは、教員に対するクレームはないが実態とあっているかはこれだけでは不明瞭である。以上の点から、現行のカリキュラムは無理なく実施されていると判断するが、授業への参観企画に、教員の動員可能であることは年度末毎に確認することとした。

2.2.3　授業改善の取り組み

生物資源学部では、2011 年度より、各教員が、学生の理解を助けるために行っている、授業（学生実験を含む）上の工夫を調査により収集し、全教員でその情報を共有する取り組みを行っている。

本年度は、「教員個人が授業改善や学生の意欲向上のため工夫していること」を調査した。

・教員個人が授業改善や学生の意欲向上のため工夫していること

学生の好奇心を高めるため、講義内容に関連した最新の話題を写真・動画・配布物等を用いてできるだけ紹介するように心がけている。3 年生の講義では、毎回ミニッツペーパーを利用して理解度等を把握し、次回以降の講義の進め方の参考にしている。ミニッツペーパーには自由記述欄を設けており、質問・依頼事項等を次回の授業の冒頭にて説明するようにしている。

本講義を修学するのに必要な基礎学力を備えている学生は少ない、と認識している。故に、講義内容を本質的事項に厳選し、初歩的物理・化学・数学の解説を多くとりいれ、学生の関心・理解度が低下しないよう注意している。また、少しでも学生の受動的な講義とならないよう、講義は板書で行い、適宜、質問等を行っている。
学生実験：実験結果に関する演習問題を課して実験内容の理解を促している プレゼンテーションの一環として実験結果や演習問題をグループで発表させている 授業：毎回授業内容の小テストとその解答説明をプロジェクターを用いて行い疑問点が残らないようにしている
講義は、すべてパワーポイントファイルを使用し、印刷したものを配布している。印刷版は、空欄を設け、重要な文言をスライドから書き写すようにしている。 各回の授業開始時に、前回の復習の小テストを実施している。前回配布したプリントを見ながら答える方式で、重要なポイントを再確認してもらうようにしている。
○食品サンプルや栄養剤・香料成分などを回覧し、講義に登場する栄養素・食品成分・加工法が身近な食品の中にどのように利用されているか関心を向ける機会にしている。 ○具体的な食事・薬剤・体調を例にあげて、栄養素の意義を身近に感じる工夫にしている。 ○ときどき学生にクイズを出している。 ○小テストで重要ポイントの理解度を確認しながら授業を進めている。
（1）実際に培養した微生物を見せる。 （2）日本で産業利用に成功した微生物の例を紹介する。 （3）日本人研究者の世界的な功績を紹介する。 （4）重要な語句・内容のまとめを数回の講義ごとに配布する。
習熟度と関心の状態を把握するために毎回、出欠を兼ねた小テストと感想用紙への記入をしてもらっている。 講義内容の発展課題としてグループでのプレゼンテーションの時間を設けており、可能な限り学生も参加したかたちでの講義を心がけている。
3年生後期のため、単位が足りない学生が多く受けており、学習意欲に乏しい学生が多い授業です。初めに授業の流れをまとめたプリントを配り、その日の授業内容と授業で覚えて欲しいキーワードを示しました。板書を中心に行いました。簡単な実験や子供向けのおもちゃなどを利用し、それをきっかけに、授業に関心が持てるよう心がけました。
授業内容の理解を助けるために、動画を利用しています。
毎回の授業の最後１０分間で、ミニッツペーパーを配り、その日の授業の内容で考察する点について、課題をだしている。この課題を解決するために、隣や前後の学生同士が話合い、いわゆるアクティブラーニングさせることにより、より理解を深めるように工夫している。
最低限覚えるべき内容は繰り返し説明し、小テストなども利用した。理論的な解説は必要であるが、なかなか頭に入らないことも多いため、身の回りにある具体的な例を引用して説明し、興味を持って理解してもらえるようにした。 教員から学生への一方通行にならないように、グループ討議を行った。数人のグループに分け、1つのテーマを議論し、結論をまとめグループごとに発表してもらう方式を取った。

これによって、それぞれの学生が意見を述べ、最後にグループとして意見としてまとめるという自発的な姿勢が多少でも身につくと考えられる。
パワーポイント等を用いて授業内容を視覚的に理解できるようにしている。説明の合間に十分な時間をとり、ポイントを整理しながらノート作成できるようにするとともに、問題演習を時間内に行って、理解を助ける工夫をしている。
講義では、わかりやすい講義資料を作成することを心掛け、具体的事例の豊富な資料を作成した。また、一方通行の講義では学生を飽きさせてしまうと考え、授業内の調べ学習や授業後の振りかえりシートを取り入れ、アクティブラーニングを実践した。さらには、動画の視聴や一般向け書籍・記事を読む時間を設けて、学習内容の定着を促進するような取組みを実施した。
授業では、基本操作、基本的知識を中心とした内容構成で、専門知識の習得を目指しながら、社会で応用利用されている実用例や、最近の経済新聞に掲載された最新技術をトピックスとして紹介することで、基礎から応用までの研究発展を理解しやすいように努めた。 また民間企業で活躍されている方を外部講師として招聘し、今後、社会に出る学生たちに求められる人間性や技術力について、わかりやすくご講演いただいた。
当学部の学生は教科書で学んだことはある程度頭で理解しているが、実物を見たことも触ったこともないことが多いので、作物の実物（さく葉標本や果実、種子）を授業中に回して触らせたり、加工品を回したりしてできるだけ実物に触れることを経験させている。しかし、最近は加工品を回しても食べる学生がいなくなってしまったのが寂しい。また、実物を回せないものについては、海外調査の折などに撮ったスライドや作物のスライドを見せて具体的に理解できようにしている。また、以前は定期テストの 2 週間前に配布していたテストのための練習問題を今年度は授業初めに資料とともに配布し、授業の要点を予習したり授業中に確認したりできるようにした。
・地域の実務者を講師に招いて特別授業を行っている。その中で、授業科目の内容が就職など将来の進路選択にどう結びつくのかについても話していただいている。 ・授業時間内の区切りごとに「分かったかな、どう思うかな」などと学生に呼びかけている。また、図表も含めてノートを取らせる工夫をしている。
講義では、初回に全体の概要をスライドで示し、歴史的な背景や、現在の（解決すべき）課題等との関係をつかめるように、および、化合物の香りを体験する等、当該講義と生活との関係に関心を持てるように工夫している。 通常の講義では、重要なポイントは板書し、ノートに写させている。図と文章の両方で理解することが大事と考えている。また、質問に答えさせたり、演習問題を解かせることで、双方向的な講義を心がけている。身近な化合物の利用をグループ毎に調べて、発表してもらうことも双方向的な講義の試みとしている。 実験では、データのまとめや解釈をグループ毎に発表させ、互いに学び合うよう工夫している。
生物有機化学 化学と生化学の融合領域の学問である「ケミカルバイオロジー」を理解するためには、生体分子の基本的な反応機構の原理を正確に理解しなければならない。本講義では、生化学に共通する反応機構および脂質、炭水化物、アミノ酸、ヌクレオチドの代謝、さらに、

医薬品などの天然物の生合成を中心にこれら生体反応を有機化学により解説している。 生化学に共通する反応機構として、求電子体と求核体、求電子付加反応の機構、求核置換反応の機構、求核カルボニル付加反応の機構、求核アシル置換反応の機構、カルボニル縮合反応の機構を概説し、天然物の生合成を中心にこれら生体反応を有機化学の視点で解説している。

応用微生物学 II

応用微生物学は、バイオテクノロジーの重要な学問領域で有り、分子生物学の発展に伴い進歩が著しい分野でもある。本講義では、微生物の重要な機能について解説するとともに、微生物の産業利用に必要な幅広い知識を体系的に習得することを目的とする。 微生物学の基礎と応用の相互関係を理解しながら微生物バイオテクノロジーの基礎概念を修得させ、応用微生物学に関する高度な知識を応用するための専門的能力を育成している。

2.2.4 授業改善活動についての課題と展望

授業評価の結果からは、総じて良好な講義が進められていることがうかがえる。「教員個人が授業改善や学生の意欲向上のため工夫していること」のアンケートを実施したところ、ミニッツペーパーや授業内でのディスカッション、発表などのアクティブラーニングを採用したり、食品・作物などの実物や動画など学習効果の高い教材を使用したり、様々に工夫する教員が多数あり、このような授業改善への取り組みが授業評価におけるよい評価につながっていると考えられる。今後もこのような取り組みを継続し、また、各教員の取り組みを学部全体で実施していくことで、学生の学習意欲の向上につなげていく必要があると考える。

2.3 海洋生物資源学部（田原大輔）

2.3.1　授業評価

昨年は全ての項目で全学平均値より下回っていたが、海洋生物資源学部の平均は前期後期ともに全学の平均値と大差は無かった。昨年よりも、本学部授業の項目では全学平均に近くなり、全体評価でも全学平均に近くなった。今後も、学生がより理解しやすく、関心を持てるように授業内容の改善を心掛けていく必要があると思われる。

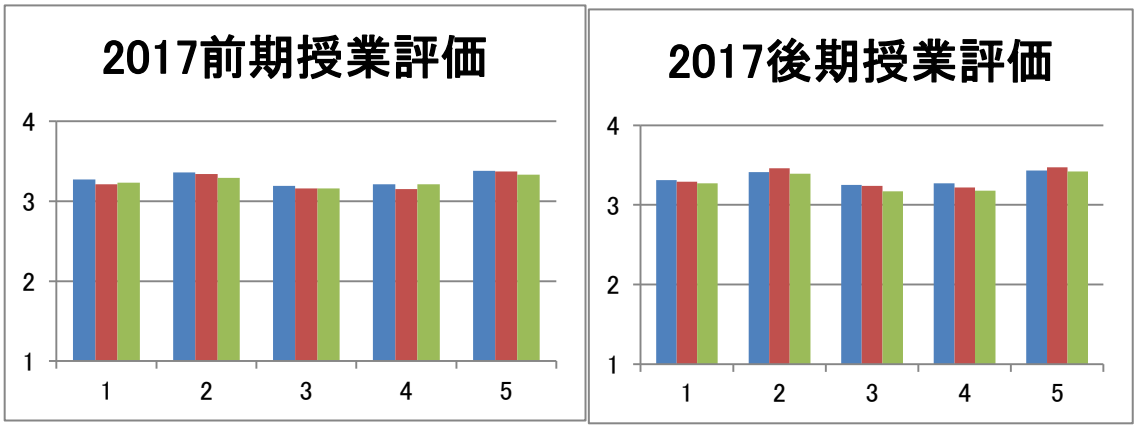


図　2017 年度前期および後期の海洋生物資源学部の授業評価結果
1 点が低い評価、4 点が高い評価
授業評価項目　１．授業意欲；２．授業方法；３．内容理解；４．関心；５．総合評価
青色：全学の平均、赤色：海洋生物資源学部の平均、緑色：海洋生物資源学部の授業の平均

2.3.2　授業公開の方針と実績

(1) 方針

授業公開は、普段知ることのない他の教員の授業に参加し、担当教員や他の授業参加者との意見交換を通じて、自分の授業をより良いものにするためのヒントを得る機会の提供を第一の目的とする。授業公開は大学教育における画一的で理想型の模範授業を目指すためのものではなく、教育の自由が保障されるなかで、個々の授業内容に合わせたより特色のある授業を継続的に育むことが大切である。そのため、授業の内容について批判を行うのではなく、お互いを尊重しながら、特に授業の方法について教員同士が学び合うことを趣旨として実施している。

2017 年度の授業公開は実施しなかったが、学部の方針として今後も授業公開は継続して実施していくことを確認した。次年度以降は、新任教員が増えてくることが予想されるため、年 1 回程度は授業公開を実施して、新任教員と在任教員の間で意見交換できる機会を提供するよう努めていく。

(2) 実績

無し

2.3.3　ＦＤ研修会への参加

第 8 回 FD 合宿研修会

日　時　：　2017 年 9 月 6 日（水）～7 日（木）

会　場　：　福井工業高等専門学校

参加者　：　本学から田原

本研修会の 2 日目に参加し、金沢大学の杉村氏による「国内における教学 IR の現状と展望 IR と FD・SD を繋ぐ大学教育開発へ」および、本学の徳野氏による「F レックス学生意識町の報告」を受講後に、ペアディスカッションに参加した。前者の講演では、大学が教育情報を用いて自らの活動状況を把握・分析し改革につなげる IR（Institutional Research）機能の向上を紹介していた。つまり、学生の学習効果等の教育効果について調査分析を大学自らが実施していくことであった。また、優れた授業実践の 7 原則として、１）学生と教員のコンタクト（アイコンタクト等）を促す、２）学生間の相互関係と協力する機会（学生同士のディスカッション）を増やす、３）アクティブラーニングを促す、４）迅速にフィードバックする、５）学習に要する時間の大切さを強調する、６）学生の期待の高さを伝える、７）多様な才能と学習方法を尊重する、との説明があった。教員と学生のコンタクトの増加や学生同士でディスカッションさせることも重要であることが理解できた。さらに、教員からの一方的な話だけでは深い学びに繋がらないとし、「学生は、学んでいることについては話をし、書き、過去の経験と関連づけ、そして日常に応用しなければならない。さらにはそうしたことを通して、学んだことを自分の一部にしならければならないこと。」を紹介されていた。

後者の講演では、３・４年時に自己成長の認識・実感が高くなること、さらに、将来展望と現状については 4 年次 11 月でも見通し無しと答える学生が毎年 20%程度存在することを指摘されていた。F レックスの分析結果を教員の授業改善にフィードバックするシステムが構築されると、IR にもつながっていくと思われる。学生にも分析結果をフィードバックすることで、学生の生活・学習時間の程度を認識する機会にもなり、就職活動の自己理解度を把握することにもつながる可能性があると考えられる。本学でも、このような調査結果が教職員にフィードバックされることに期待したい。

2.3.4　授業改善についての課題と展望

海洋生物資源学部における今後の FD 活動方針

例年通り年 1～2 回程度の授業公開を行い新任教員にも参考になるような体制を構築していく。また、F レックスの積極的活用を促すために、本学部授業での F レックスの活用事例について教員に再度周知する。

2.3.5　その他

F レックス LMS 活用実績

2017 年度における海洋生物資源学部の F レックス LMS 活用実績は、開設数が 24 科目(前

期 13、後期 11)で、昨年より 2 科目増加した。ただし、全体のうち一部の教員しか活用しておらず、今後は利用する教員を増加することが必要だと思われる。

2.4　看護福祉学部（北明美）

本年度実施した授業評価，授業公開，授業改善への取り組み，FD 研修，授業改善についての課題と展望を以下に報告する。

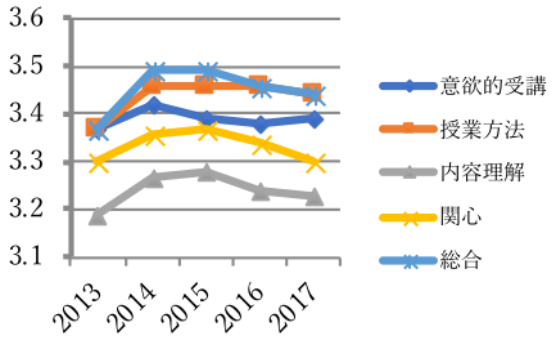
2.4.1 授業評価

2.4.1.1 看護学科

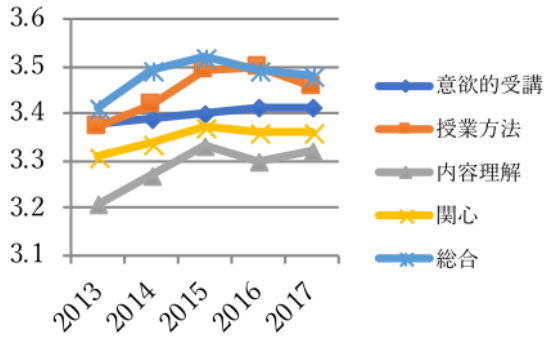
授業アンケートの結果について、まず昨年度と比較してみると、前期の「意欲的受講」、後期の「内容理解」は若干上昇したものの、それ以外の項目では、前期後期とも総じて変化はなかった。

次に過去5年間の推移をみてみると、前期では2014年をピークに「授業への関心」が若干低下傾向を示し、それ以外はほとんど変化が見られなかった。後期では 2015 年をピークに総じて若干低下傾向であった。また、項目別得点においては、前期後期の何れの年度も「意欲的受講」と「授業方法」は高く、「内容理解」が最も低かった。

以上のとおりアンケート結果からみた授業評価は、概ね特段の変化はみられないが、「意欲的受講」が高いにも関わらず、「内容理解」と「授業への関心」が低い傾向にあることから、「内容理解」と「授業への関心」を促すべく「授業方法」の見直しおよび改善を図る必要があると考える。



看護学科　授業アンケート結果（前期）

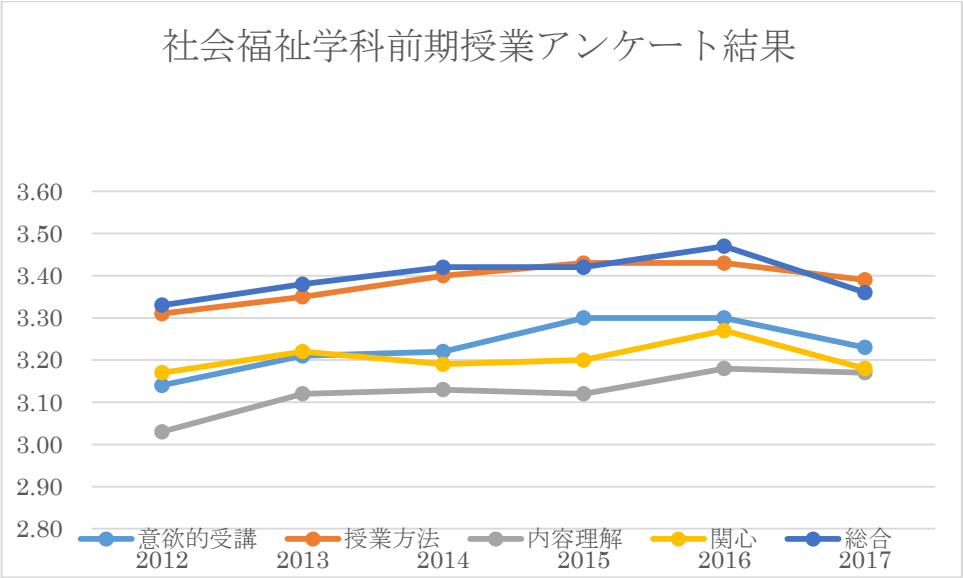


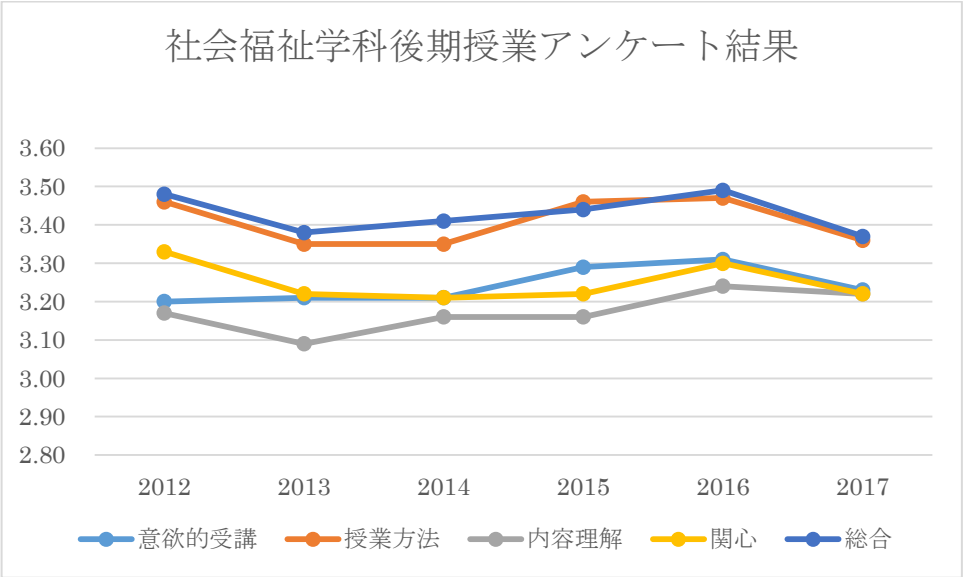
看護学科　授業アンケート結果（後期）

2.4.1.2　社会福祉学科

2017 年度前期・後期とも、授業における内容理解については、最も高かった前年度の水準を維持した。しかしそれ以外の項目については微減とはいえ、数年前の水準に戻った観がある。いずれもコンマ以下の変化とはいえ、全ての項目において上昇傾向になるトレンドを創出することが望ましい。また、社会福祉職以外の進路を選ぶ学生が増えつつある傾向との関係も今後分析していく必要がある。

ただし、社会福祉学科においてはオムニバス授業が多く、その意味では現行の授業評価方法は必ずしも学科全体の動向を表すものではないことに注意が必要である。





2.4.2　授業公開

2.4.2.1　看護学科

看護学科では例年、前期、後期にいくつかの科目で随時公開しているが、参観した教員はいない。実質的に授業公開が成立しないのは、看護学科の授業カリキュラムでは座学の授業だけではなく、演習など複数の教員がかかわることや学外実習（臨地実習）があり時間割がタイトであることも要因のひとつと考えられる。現状では、担当する教員同士で教育方法や授業改善について適宜、ワーキングや検討を行っている。以下（2.4.3.1）で、看護学科独自の教育方法や授業改善への取り組みについて報告する。

2.4.2.2　社会福祉学科

社会福祉学科では，2017年度は授業公開を行わなかった。これまでの公開で参観者がほとんどいなかった理由としては，学外実習（ソーシャルワーク実習，精神保健ソーシャルワーク実

習）や演習科目が多く時間割がタイトであることがまずあげられる。ただし現状として社会福祉学科独自の取り組みが行われているので,以下に報告する。

2.4.3　授業改善への取り組み

2.4.3.1 看護学科

昨年度、看護学科では、教育理念に基づく発展的かつ柔軟な教育改善を目指すとともに、看護学教育の水準の向上を諮ることを目的とした看護教育協議会（通称：教員会議）を設置した。

今年度は6月と3月に教員間の自由な意見交換会を行った。6月の意見交換会では、学生の学修状況の把握とその対応として、学力差がある学生、特に学力の低い学生への学習に関する特別指導等の必要性について話し合いがなされ、今後検討することとした。3月は、2019年度のカリキュラム改正に向けた準備として、大学における看護系人材養成の在り方について話し合いがなされた。

国際交流事業の一環として、昨年度10月23日のアメリカオハイオ州フィンドレー大学との学術交流協定の締結に基づき、初めて今年度6月に基礎看護学領域の教員1名（ご令室同伴）と4年生の留学生1名が来学され約3週間の日程で学術交流等を実施した。まず、教員相互の親睦を深めるべく国際交流歓迎会やランチョン交流会を開催した。日本の看護教育を体験してもらう企画として小児看護学、在宅看護学、基礎看護学の演習や講義にも参加してもらった。フィンドレー大学教員から看護技術演習の日米の違いに対する助言を得たり、患者役として日本独特の足浴を患者役になって体験してもらったりなど双方の学生・教員間の交流ができ、授業が活性化した。また、医療施設の見学、特別講義、発表会などに加え、観光や歓迎会などを学生とともに企画し、看護学科の学生の語学教育や専門分野の知識を深めた。また、2月12日から2月26日の15日間、本学看護学科2年生3名（佐藤文准教授同行）をフィンドレー大学に派遣した。保健学部看護学科を拠点としてアメリカの看護と医療に触れ、異文化における看護への関心と国際的視野を広めた。

2.4.3.2　社会福祉学科

社会福祉学科は実習,演習教科を含めてオムニバス授業が多く，担当する教員間において授業内容や授業方法を検討する機会を設けている。特に実習,演習教科では複数の教員間の連携が必要となり,授業方法等についての話し合が行われている。また，実習については,実習施設,機関等の実習指導者である社会福祉専門職者との連携を密にすることが学生の学習に対する意欲を引き出し，学修の成果を高めることにつながることになるため,年に1回,実習指導者を本学に招いて,講演会と連絡等の会議を行っている。学内では,ソーシャルワーク実習担当者会議,精神保健ソーシャルワーク実習担当者会議を毎月開催し,年に数回合同での実習担当者会議も行っている。学生の今の状況を教員がいち早く把握し,実習を通して学生の学びを系統的に深めていくためにも教員間の情報の共有が必要と考えている。また学生一人ひとりの個性を活かしつつ,専門職者として必要な知識,技術の向上を目指し,個人面談を実施しながら学業等に意欲を持たせる試みをしている。

当学科は,社会福祉士ならびに精神保健福祉士の養成に関わっているため,日本ソーシャルワーク教育学校連盟,公立大学協会社会福祉学系部会などに加入し,部会や連絡会議,セミナーなどに定期的に参加している。具体的には,それぞれの担当者を決定し,学科の代表として

各種の部会,セミナーに分担して参加している。こうした機会にＦＤに関わる議題が取り上げられたり,ＦＤ関連のセミナーが実施されたりすることがある。ＦＤに関連する部会,セミナーの個別の内容については（2.4.4.2）に報告する。そこで得た知見は持ち帰って学科会議で報告され,教員間で知識の共有が図られるとともに,それに関した話し合いも行われる。

2.4.4　FD 研修

2.4.4.1 看護学科

下記(1)、(2)の研修会に看護学科の教員が数名参加し自己研鑽に努めた。
また、下記(3)のその他の関連研修会では普照早苗准教授が講師を務めた。

(1) 第 8 回 FD 合宿研修(2 日間)

日時:2017 年 9 月 6 日(水)13:00～18:00、7 日(木)9:00～11:30
会場:福井工業高等専門学校
主催:Fレックス
1 日目プログラム
セッション1(13:10～13:50)
講演:「アクティブ・ラーニングとリーダーシップ教育」
講師: 日向野 幹也氏 (早稲田大学大学総合研究センター教授)
セッション2(14:00～18:00)
ワークショップ「アクティブ・ラーニングとリーダーシップ教育」
概要:
アクティブ・ラーニングは「学生・生徒のリーダーシップを引き出す授業」という面を持っており、立教大学や早稲田大学で実証されているように、リーダーシップ教育のノウハウを使うと能率がよく学生の能力開発や学部の組織開発にもなる。今回は教員や TA 側に必要になる質問力とフィードバック力の効果を体感できる「質問会議」ワークショップを行った。
2 日目プログラム
セッション3(9:00～11:30)
講演:「国内における教学 IR の現状と展望 IR と FD・SD を繋ぐ大学教育開発へ」
杉森公一氏(金沢大学国際基幹教育院准教授)
概要:
大学・短大教育の入口(入試)から出口(就業・進学)までを貫く学習成果の質保証の枠組み、教職員がいくつかの階層(ミクロ・ミドル・マクロ)で行う教育開発、部局ごとの小さな IR を結ぶ組織開発(ボトムアップ)、ポリシー策定から大きな IR からの組織開発(トップダウン)の実際を概観し、教学IRの求められる背景と行う主体の階層を理解する。IRを通して見た教育開発・組織開発の物語から、自大学と地域の高等教育機関連携を展望する。

「F レックス学生意識調査の報告」徳野淳子氏(福井県立大学学術教養センター准教授)とディスカッション

(2)看護基礎教育検討委員会

第 1 回研修会

日時:2017 年 6 月 3 日(土)10:00～16:00

会場:福井県看護協会会館

主催:看護基礎教育検討委員会

テーマ:「学校と臨床現場の連続性・一貫性を叶える教育をデザインする
ーアクティブラーニングをこえて AI 時代の看護教育を始めよう！
意志ある学びをプロジェクト学習・ポートフォリオ・対話コーチングで叶えるー」

講師:鈴木敏恵氏(シンクタンク未来教育ビジョン代表)

第 2 回研修会

日時:2017 年 10 月 28 日(土)13:00～16:00

会場:福井県看護協会会館

主催:看護基礎教育検討委員会

概要:

「看護基礎教育の実践報告会」として学生の看護への意欲関心を高める教育方法の工夫の実際を聴いてグループディスカッションを行い、グループ毎に発表した。

実践報告発表者:小川広宣氏(福井県立看護専門学校)
奥田豊子氏(福井市医師会看護専門学校)

(3)その他の関連研修会(看護管理能力育成研修会)

日時:2017 年 9 月 23 日(土)9:30～15:30

会場:福井県看護協会会館

主催:公益社団法人福井県看護協会

講義:テーマ;「訪問看護教育に役立つ“在宅看護論”」

講師:普照早苗氏 (福井県立大学看護福祉学部看護学科准教授)

講義(プログラム):

【午前】

1)最新の国試の傾向
2)近年の在宅看護論
3)最近の学生の傾向と対策
4)県立大学における在宅看護:授業の実際(講義・演習)
5)在宅看護における倫理の問題:ミニワーク

【午後】

1)在宅看護過程
2)実習に向けての準備
3)在宅看護実習の実際
4)話題提供:管理者インタビュー調査の結果
5)フリートーク

当学科の FD 活動

研修:フィンドレー大学 看護研修 短期留学生 引率および教員研究活動

期間:平成 30 年 2 月 12 日～2 月 28 日

場所:フィンドレー大学(米国オハイオ州)

引率教員:佐藤文准教授

所感:

フィンドレー大学と本学看護学科において、今回は本学からの初回の交換留学生(2 年次生 3 名)派遣であり、主たる目的は学生の引率であった。プログラムでは、フィンドレー大学およびオハイオ州内の施設で米国での教育システム、医療システム、またこれらの施設の医療従事者の活動について知る機会となった。

①看護学科の授業:

授業は少人数制で、教員の問いかけに学生らが積極的に発言していた。このような学生の能動的な取り組み姿勢に感銘を受けた。交換留学生らに、今後の授業への取り組みに活かせるように話し合うことができた。授業の後、教員から授業の準備や、教育に用いる備品等について情報交換することができた。

②看護学生との交流:

看護クラブの学生を対象に、交換留学生らは日本独特の足浴のデモンストレーション、日本の病院食としてお粥とご飯の試食会を実施した。この活動に際し、学生らに効果的に実施するために事前にアドバイスし、実施後は「人に伝えること」と「交流すること」について考える機会とした。

③病院・高齢者施設の視察:

4 施設を視察したが、中でも Cleveland Clinic は、オストメイトの継続ケアに関する研究に関する活動の一環として訪問した。この病院は世界的に有名で Wound Ostomy Continence Care Nurse(WOCN)の教育発祥の地でもある。わたくし自身が WOCN であるため事前にこの病院の WOCN と連絡をとり、当日はベッドサイドケアに同行し、ケアの実際の見学、患者とのコミュニケーション、他の WOCN との情報交換、継続ケアシステム等、様々な活動ができた。

④小学校の視察:

小学校での看護師(スクールナース)の役割は非常に幅広く、日本での担任の役割と養護教諭の役割を兼ねていた。貧困層の生徒らへの対応(清潔の援助、食事・衣類のサポート等)からは、米国社会の縮図を垣間見たようであった。

⑤日本の高齢者へのスキンケアに関する講演:

看護学科教員および学生に“Skin and wound care for elderly people in Japan”というテーマで講演した。日本では特別な教育を受けた WOCN は超音波診断装置を用いて生体のアセスメントをしていることを伝えた。この件に関して、保健学部の学部長はじめ看護教員らから質問が集中した。専門分化している米国では、ナースが超音波診断装置を用いることはないからである。互いの国の違いを認識する機会となり、よいディスカッションとなった。

⑥ピッツバーグ大学病院ナースプラクティショナーとの交流:

最終の週末にペンシルベニア州 ピッツバーグ大学小児病院で勤務する日本人ナースプラクティショナーと情報交換する機会を得た。思春期外来での性教育や性同一性障害の若者へのか

かわり、米国での看護の専門性と医療制度について情報収集した。

この短期留学を通して、日米の教育・医療の違いを知ること、また学生や教員との交流することができた。交換留学生はカルチャーショックを受けていたと思われるが、今後、彼らの成長によい影響を及ぼせるよう同行した教員としてサポートしていきたい。また、今後留学を希望する学生への支援活動にも活かしていきたい。

2.4.4.2　社会福祉学科

①2017 年度日本ソーシャルワーク教育学校連盟主催　ソーシャルワーク教育全国研修大会参加報告

日時：2017 年 6 月 24 日（土）～6 月 25 日（日）

場所：武蔵野大学　有明キャンパス

本学参加者：橋本・木村教員,松井主任（プレ企画のみ）

全体テーマ:「教えるチカラは十分ですか？　実践力のあるソーシャルワーカーを養成する『教授法』」

【1 日目・午前】プレ企画

「事務職員向け：社会福祉士・精神保健福祉士養成課程の確認申請及び変更届に関する勉強会」

2 大学が厚生局より受けた指導内容と指摘された事項の実例についての解説と各地方厚生局管内の養成校出席者間の情報交換。

【1 日目・午後,2 日目午前】教授法・ワークショップ（セッション 1～5）

アクティブラーニング(AL)についてのレクチャー。セッション１は講義法と e ラーニングの急展開による知識教育の現状についての講義。セッション２は 3 大学の実践例報告。セッション４は参加者各自作成の AL 授業計画書を各グループで検討しあうブラッシュアップの時間。セッション５は SW 養成教育における教授法の課題と展望,AL の実現には必要な取組等をテーマに講演があった。

【2 日目午後】

分科会３「小論文やレポートの添削方法と評価」

Z 会の講師による添削指導のポイントや評価について講義および事例を用いたワーク。論述内容と表現表記の項目別評価があり,評価基準として参考になった。批判一辺倒とならずコメントを読み学生が書き直す意欲を持ってくれるかが添削の肝要であることが強調されていた。

分科会４「ソーシャルワーカーのための多職種連携教育（IPE）におけるアクティブ・ラーニングの実際」

既に IPE に取り組んでいる２大学のカリキュラム実例と AL 手法についての紹介。その後,参加者がグループに分かれて各校での IPE の現状と実施上の困難等について話し合い。

以上について,同年7月12日の学科会議で参加者から報告がなされ,教員全体で情報を共有した。

②2017 年度 F レックス第 8 回 FD 合宿研修会

日時　2017 年 9 月 6 日（水）～7 日（木）

会場　福井工業高等専門学校
本学科参加者　北教員（1 日目のみ）
【1 日目】
セッション１　講演「アクティブ・ラーニングとリーダーシップ教育」
講師　日向野幹也早稲田大学総同研究センター教授
概要
最近の「分散型リーダーシップ」理論では,リーダーシップは一部の限られたリーダーの資質・能力ではなく,メンバー全員に必要な基礎的･汎用的能力と位置づけられている。この意味でリーダーシップはアクティブ･ラーニングの基盤を形成する。リーダーシップとは,チームの目標達成のために発揮する影響力のことで,全員がリーダーシップを発揮したとき,相乗効果が生まれ,チームは奇跡を起こすことができる。
特にアクティブ･ラーニングを目指してはいない授業や部活,家庭においても学生がこの意味でのリーダーシップを発揮できるよう養成することで,キャリアを拓くリーダーシップ教育の第一歩ともなる。
セッション２　ワークショップ「アクティブ・ラーニングとリーダーシップ教育」
概要
アクティブ・ラーニングで学生のリーダーシップを引き出すために,教員・TA 側に求められる質問力とフィードバック力の効果を体感する目的で設けられた「質問会議」ワークショップ。「質問会議」とは質問とその答えを言い合うだけで問題解決を図る会議方法で,メンバーのチームワークと支援型のリーダーシップを増強する効果がある。
【２日目】
セッション３　講演「国内における教学 IR の現状と展望 IR と FD･SD を繋ぐ大学教育開発へ」
講師　杉森公一金沢大学国際基幹教育院准教授
概要
学習成果の質保証のために,教職員がミクロ・ミドル・マクロ各階層で行う教育開発,部局ごとの小さな IR を結ぶ組織開発（ボトムアップ）,ポリシー策定から大きな IR からの組織開発（トップダウン）をそれぞれ概観し,教学 IR を行う各主体の階層について理解し,自大学と地域の高等教育機関連携を展望する。
「F レックス学生意識調査の報告」徳野淳子氏（福井県立大学）とディスカッション

1 日目について
セッション１では,分散型リーダーシップの養成教育が,学生生活のあらゆる面で学生のモチベーション・自己肯定感・大学教育への満足度をいかにたかめるか,講師のこれまでの実践に基づいて説得的に解説された。
続くセッション２では,5−6 人ずつ各グループに分かれた教員が当事者の問題解決につながるサポーティブな質問を工夫する体験をしただけでなく,講師が帯同したゼミ生が各グループのコーチとして文字通り見事なリーダーシップを発揮して会議を運営していくのを目の当たりにし,一同感嘆しきりであった。
このコーチの存在が質問会議には不可欠であるが,ただし大学内でその体制が整うまでに 6 年を要したとのことで,そこが本学に導入しようとする場合の第一の大きな関門になると思われる。

以上について,同年9月13日の学科会議で参加者から報告がなされ,教員全体で情報を共有した。

③平成29年度　公立大学協会社会福祉学系部会連絡会

日時　日時　平成29年9月30日（土）

場　所：神奈川県立保健福祉大学

本学参加者：輪倉・奥西・木村教員、柴野課長（教育推進課)、松井主任（教育推進課）

プログラム１　「セルフヘルプの現在」（ヒューマンサービス研究会共催シンポジウム）

プログラム２　「社会福祉学系部会連絡会」

両プログラムあわせて20〜30名程度の参加者であった。他大学から本学に対して国家試験の合格率が高いことについての質問があり、本学科の実践が注目されているのを認識した。来年度は本学が主催校となるため、その準備のための事務的な引継ぎも行った。

④日本ソーシャルワーク教育学校連盟・第47回全国社会福祉教育セミナー

日時　2017年11月4日（土）〜5日（日）

場　所：北星学園大学

本学参加者：今井・奥西・木村・吉川・相馬教員

【１日目】

＜プログラム１＞

日本ソーシャルワーク教育学校連盟ソ教連北海道ブロック企画「ソーシャルワーク専門職養成教育のこれからをどう構想するか」

北海道ブロックでは,実習評価表の統一や独自組織による協議,調査･研究,啓発活動等で養成校と実習施設機関との連携体制を確立してきた。さらに今後は将来の人材確保問題についても施設機関・養成校の協力関係を深める必要が提起された。またOSCEおよびCBTへの傾倒のあまり,価値教育が軽視されることは避けるべきであること,実践的な演習教育と人権感覚の醸成が必要であることが確認された。

＜プログラム２＞

「地域共生・地方創生への挑戦〜FUKUSHIの可能性を探る〜」対談および討論

前半では上野谷加代子教授を対談相手として,障害福祉サービスを中心に高齢者,子ども支援を組み合わせている「社会福祉法人ゆうゆう」の実践が紹介された。サービスの受け手が与え手としての役割を獲得しているという。大学教育においてもこのような場に参加できる機会を学生に提供するべきという提言もなされた。

討論においては2040年には18歳人口が80万人に減少する中で社会福祉職への意欲をいかに確保するかや,社会福祉における「生活モデル」の再検討の必要等が論点となった。

【２日目】

第１分科会「地域を基盤とした実習プロジェクトチーム報告」

中山間地域と離島での地域包括型モデル実習例について報告がなされた。夏休みに実習生4名程度が約 1 ヶ月共同生活を行いながら実習に取り組み,住民の生活問題や近隣との関係構築についてより深く学ぶことができている。地域住民にとっても「実習生を育てる」という意識が芽生え,実習受け入れによって,職員,地域,住民が変わるきっかけとなるという効果も生まれたという。

第２分科会「社会福祉法人に期待される役割　求められる地域貢献とソーシャルワーク教育と

の連携」

入所前の段階からの支援として地域全体を対象と捉えた経営を行っている特別養護老人ホームの実践や,社会福祉法人の責務を職員に配布するダイアリーに明記する等の工夫等が紹介された。

また,養成校側からは,地域共生社会に対応するためのカリキュラム変更においては,実習においても地域貢献事業がカギとなるのではないか,個別支援と地域支援の連続性のある実習を今後作り上げていきたいといった展望が示された。

第４分科会：「大学１年生の提言『私たちの合宿実習 30 日間～西桂町（山梨県）　地域福祉推進・地域活性化プロジェクトで見えたこと』」

厚生労働省の補助による「実践的社会福祉士養成教育のあり方と地域を基盤にしたソーシャルワーク実習の基盤構築に向けた開発的研究事業」として,地域の包括的なモデル的実習に参加した学生たち自身による報告。入学した直後に座学の授業とは異なった学外演習を行うことで,実践への意欲・意識を１年生の段階から高めることの意義等が強調された。

また,産学連携教育/学外学修プログラム（大学教育再生加速プログラム）の取り組みも紹介され,社会福祉学科の学生とともに参加する建築デザイン学科などの学生が社会福祉的な興味や視点を持ち,自身の専門学習にその視点を活かしていくことができること,社会福祉学科生にとっても他分野の学生との交流,地域の住民や商工会との連携により,多様な視野を得られる利点などが紹介された。

緊急企画「ソーシャルワーカー養成教育の見直しの方向性」

今後の方向性として,下記の点が具体的に指摘されていた。

・実習の体系を固めてから,講義の内容を考える→従来の縦割りの講義科目ではなく,ＳＷの機能から科目を設定する　例）アセスメント論

・コアカリキュラムを作り,周辺領域は養成校の考えによってカリキュラムを編成できるようにする

・教員の認定についても検討する等。

同年 11 月 8 日の学科会議で以上について参加者から全員に報告がなされた。

当学科主催 FD 活動

① 2017 年度実習関係者会議・合同学習会

日時　2017 年 8 月 7 日（月）

場所　福井県立大学永平寺キャンパス交流センター３階 多目的ホール

参加者　実習機関担当者・教員計 42 名

講演　「地域共生社会に求められるソーシャルワーカー像とは」

講師：櫛田　匠　社会福祉法人みねやま福祉会理事長、本学研究科講師

戦後の混乱期における乳児院開設を皮切りに地域住民のニーズ抽出と場づくりを積み重ねてきたご自身の実践の歴史と理念、とくに地域住民が当事者として主体的に取り組む「地域共生社会」実現に必要な福祉専門職のあり方について講演された。

② 2017 年度 実習関係者研究会議

日時　2017 年９月４日（月）

場所　福井県立大学永平寺キャンパス交流センター３階 多目的ホール

参加者　実習機関担当者・教員計 48 名

講演「これからの社会福祉士養成の課題と展望」

講師：上野谷　加代子　同志社大学大学院・社会学研究科教授

日本ソーシャルワーク教育学校連盟副会長他役職多数。

「地域共生社会」について国の政策・制度の流れ,地域福祉の視点,ソーシャルワーカー養成の視点から解説され,制度だけでは対応できない福祉課題への取組,地域包括ケアシステム・支援体制の構築に資するソーシャルワーカー養成の役割と課題等が提起された。

この講演を受けて,参加者が 8 グループに分かれディスカッションを行った。

以上について同年 9 月 13 日の学科会議で参加者より報告があり,意見交換がなされた。

2.4.5 授業改善についての課題と展望について

2.4.5.1 看護学科

(1)看護教育では 3 年後期から 4 年前期までの1年間、病院や地域の施設にて臨地実習が課せられており、臨地実習は看護教育の大きな比重を占める。学生は現場の看護師や保健師などの指導を仰ぎながら、実習の場で現実の場面のみがつくり出す看護する喜びや難しさを実感する。また、 自己の新たな発見と、自身ができることとできないことを深く自覚させられる。故に、これらに繋げられるような看護理論やその根拠を講義・演習で教授しなければならない。

今後も、これらを踏まえながら看護の特質を理解し、学習を深めていける FD が必要であると考える。

(2)フィンドレー大学との国際交流を活用し、看護学科の講義・演習に積極的に参加あるいは講義をしてもらうなど、国際的で多彩な授業展開を構築したい。

(3)教員間のコミュニケーションの場である教員会議において、授業改善の工夫や取り組みについて検討したり、具体的な事例などを紹介したりして共有をはかり、FD に活かしたい。

2.4.5.2　社会福祉学科

社会福祉学科のカリキュラムにおいては，社会福祉士ならびに精神保健福祉士の国家試験受験資格を取得するための指定科目が多く配置されていて，その取得を目的に実習,実習指導等の科目を履修する学生が多くいる．学生は実習で様々な現実と出会い,考え，悩み，揺れる中で自分の今後の専門職としての姿を創りだしていく．学生一人ひとりが自分の課題に気づき，それらと向き合い解決に向かっていくために，一人ひとりの学生にマッチした環境を教育の中で整えていくことが必要と思われる。学生が今何を必要とし，何を学ぶべきなのかを教員のサポートと一緒に具体的な経験の中で探し，学びを深めていく環境である。しかしながら講義，演習，実習の各科目の関連性について，それをどのように捉え，意味づけし，関連づけていくかということについて全教員間で十分な相互理解・コンセンサスを得るまでにはいたっていない部分があり，学生の学びを深めるための環境づくりという点でも，学科ＦＤ活動の大きな課題であると考えている．

また，近年実習を履修しないで卒業を迎え，社会福祉領域以外への進路を選択する学生も少なからずいる。その学生についても卒業後の進路を見通しながら学士力に相当する基本的な知識・技術，技能を深め，社会福祉学科での学修に興味を持って取り組むことができる意欲を引き出すことが求められる.

学生の中には,周囲の人間関係に過度に敏感になり感情が揺れ動いて､外見の表情からだけではとらえきれないようなストレスを抱える学生もいる。教育の中で学生自身が「聴く力」「考える力」「悩む力」「自己理解力と自己肯定力」「課題解決力」等を学びながら，学生生活をより充実させたものにするための工夫を検討していきたい。

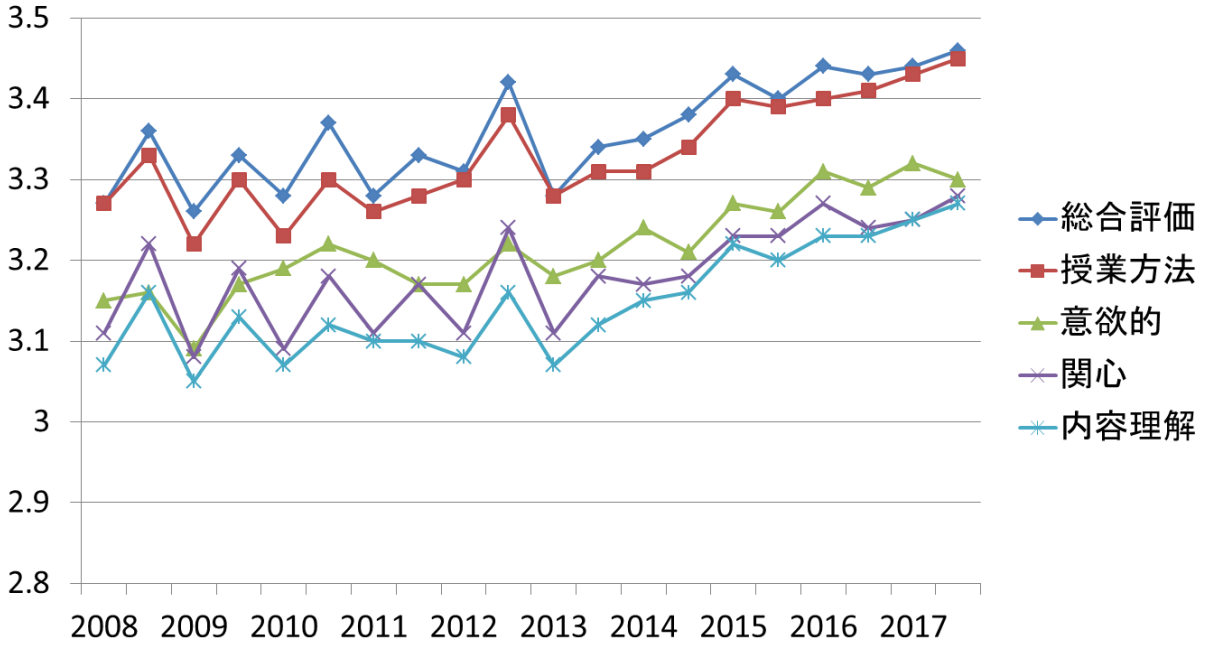
2.5　学術教養センター（加藤まどか）

2.5.1　授業評価アンケートの結果

今年度もすべての項目において高い水準であった。今年度の後期においては、「意欲的」以外の４項目において、過去10年間で最も高い数値となっている。過去10年間の変化を見ると、すべての項目において上昇傾向が続いており、学術教養センター（以下、学教センターと略）の各教員の努力の成果が現れていると考えられる。

2015年度の報告書では、全項目について後期の数値が前期の数値より低いという問題点が指摘された。今年度においては、「意欲的」以外の項目では前期よりも後期の数値が高いという結果となっており、後期に低下するという傾向は見られなかった。

一般教育	2008		2009		2010		2011		2012		2013		2014		2015		2016		2017	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
意欲的	3.15	3.16	3.09	3.17	3.19	3.22	3.2	3.17	3.17	3.22	3.18	3.2	3.24	3.21	3.27	3.26	3.31	3.29	3.32	3.3
授業方法	3.27	3.33	3.22	3.3	3.23	3.3	3.26	3.28	3.3	3.38	3.28	3.31	3.31	3.34	3.4	3.39	3.4	3.41	3.43	3.45
内容理解	3.07	3.16	3.05	3.13	3.07	3.12	3.1	3.1	3.08	3.16	3.07	3.12	3.15	3.16	3.22	3.2	3.23	3.23	3.25	3.27
関心	3.11	3.22	3.08	3.19	3.09	3.18	3.11	3.17	3.11	3.24	3.11	3.18	3.17	3.18	3.23	3.23	3.27	3.24	3.25	3.28
総合評価	3.27	3.36	3.26	3.33	3.28	3.37	3.28	3.33	3.31	3.42	3.28	3.34	3.35	3.38	3.43	3.4	3.44	3.43	3.44	3.46



2.5.2　授業公開の方針と実績

学教センターでは、授業は常時公開となっているが、近年では個別の授業参観は少なくなっている。しかし以下で述べるように、オムニバス授業や合同授業の実践により、授業参観が活発に行なわれている。

昨年度より始まったオムニバス講義「研究の世界」では、出講教員の９名が交代して引き続き 14 名の教員（亀田、島田、森、木村、デンマン、進士、熊谷、杉村、北村、大石、石原、徳野、田中、小林）が担当した。昨年度は、各回の授業に 5～7 名の教員の参観があったが、本年度も毎回 3～5 名が出席していた。専攻分野や世代において大きく異なる学教センターの各教員の授業ぶりを参観することで、昨年同様、相互啓発の効果は大きかったと思われる。一昨年度の FD 報告書においては、FD 開始の頃に比べて授業参観の実践が少なくなったということが指摘されており、このオムニバス講義の創設には学生に対する教育効果のみならず授業参観の活性化も期待されていたが、この 2 年間の実践を通じてその目的もおおむね果た

されたと言えよう。

英語の授業の担当教員の間では、合同授業や授業参観の実践がなされた。昨年度前期の英語特論(LEAP 事前研修)では、それぞれ別の教員（サッカ、長岡）が担当する２つのクラスが、計 2 回の合同の授業（スピーチ、ディスカッション、プレゼン等）を行なった。また昨年度後期の英語特論（サッカ）の授業では、永平寺町にかかわる学生のプレゼンや永平寺等での研修が実施された。この授業には、他の教員（長岡）が同行し、学生のプレゼンにコメントをする等の協力をし、授業の展開方法や指導法などを学びあう機会となった。

2.5.3　部局内ＦＤ研修

今年度は学術教養センター研究会という形での部局内 FD 研修は実施しなかったが､学教センターの教員が担当者や参加者としてかかわった、以下のような FD 研修が実施された。

①F レックス FD 合宿研修会

日時：2017 年 9 月 6 日～7 日

講師：日向野幹也（早稲田大学）、杉森公一（金沢大学）、徳野淳子（福井県立大学）

学教センターからの参加者：山川、徳野

F レックスの FD 合宿研修会が福井高専で開催された。9 月 6 日は、日向野先生をお迎えし、「アクティブ・ラーニングとリーダーシップ教育」というテーマで、講演とワークショップを実施し、9 月 7 日には、「国内における教学 IR の現状と展望　IR と FD・SD を繋ぐ大学教育開発へ」というテーマで、杉森先生からの基調講演の後、徳野先生から F レックスで実施している教学 IR の説明が行われた。

②全学ミーティング報告

日時：2017 年 12 月 13 日

講師：徳野淳子（福井県立大学・学教センター）

「教学 IR と F レックス学生意識調査について」というテーマで、教学 IR の説明の後、本学での取組みとしての F レックス学生意識調査の結果が報告され、今後の課題が示された。

③ティーチング・ポートフォリオ・チャート研修会

日時：2017 年 12 月 14 日

講師：田中洋一（仁愛女子短期大学）

学教センターからの参加者：山川、中村、松本、加藤

自分の持つ教育理念を見出し、その理念と実際の授業内容とのギャップを把握することを目的とした研修会が実施された。参加者が 2 人組みとなり､1 時間半の時間でティーチング・ポートフォリオ（TP）の簡易型である TP チャートをそれぞれ作成し、現在実施している具体的な教育内容から、ボトムアップに自分の持つ教育理念の探求を試みた。

2.5.4　授業改善についての課題と展望

昨年度の報告書で指摘されたように、授業評価調査に表れる数値は学生の立場からの数値であり、学生の力が客観的に伸びているかどうかを測るものではない。しかし、その数値の変化からは、学教センターでの授業改善の着実な前進を、読み取ることができだろう。

県立大の教員による「地域から世界へ」をテーマとした学際的総合研究が今年度より実施されているが、学教センターからは 9 名の教員が参加し、この研究の中心を担っている。今後、地域志向の教育と外国語教育をリンクさせる実践のなかで、また研究の成果として学際

的総合的オムニバス講義を創出していくなかで、教員による授業参観と授業改善の取組みの一層の活性化が期待される。

ファカルティ・ディベロップメント報告書２０１７

発行年月　2018 年 3 月

編集・発行　福井県立大学ＦＤワーキンググループ